

第八講 問題の提出（二） 一章十六、十七節の研究（三月六日）

パウロは「我は福音を耻とせず」と宣した、そして其理由として、「福音は神の力であると云ふた、力と云ふも善き力あり惡しき力がある、歐洲戰亂以前に一時歐洲人を支配するが如く見えし謂ゆる「力の福音」と云ふが如きは此惡しき力の方である、其惡きは結果が證明したのである、之とは異つて福音は神の力である、勿論善き貴き力である、即ち「信ずる凡ての者には救拯に至るべき」力である、「信ずる凡ての者」については前講に於て述ぶる所あつた、次ぎに起る問題は「救拯」の意味如何である。

救拯とは、今日頗る廣義の語として用ひられて居る、福音以外の種々なる救濟事業に於て此語は常に廣く使用されて居る、社會的意味の救があり、道德的意味の救があり、また思想上の救がある、又基督教の救についても今日の人の考ふる所は頗る茫漠たる者にして、惡しき行の改まりし事、或は福音に心を寄するに至りし事位を以て救と見做す人が多い、基督教の傳道師と稱する者の中にさへ此種の淺き見方をする者が多く、洗禮を受けて教會に加入せし事を以て救と做して安心し、其後の心靈の發育如何に關しては何らの考慮をも拂はざる者がある、眞に甚だしき誤りである

併し「救」とは元來もとよりかくの如き淺き者ではない、原語 *soteria*（ソテéria）は新約聖書に於ては永久的意味を有する語である、今此語に關する二三の大家の解釋を參考のために左に摘記して見よう。

（イ）ソテériaとはメシヤ王國における永遠の救を言ひ表はす語である（マイヤー）。

(ロ)ソーテeriaは二義を併せ有す、即ち一面滅亡よりの救出を意味し、他面神と共なる永生の交附を意味する(ゴッデー)。

(ハ)ソーテeriaはメシヤ的救出を意味する語で、猶太教に於ては民族的の狭き語であるが基督教に於ては高き希望を傳ふる語である、後者の意味に於ては此語はメシヤ的救出の全範圍——即ち消極的には全人類に臨める神怒よりの救済、積極的には永遠生命の賦與を包含する者である(サンデー)。

即ち救とは唯の悔改を意味する語ではない、此世に於ては罪に死してキリストに生き、罪の結果たる死(神怒、滅亡)より救はれ、復活して主の榮に似たる榮に浴し、永遠の世界に永遠の生命を受得する事これ即ち救である、新約聖書のソーテeriaは之れ以外を意味する者ではない、これ忘るべからざる事である。

此事は新約聖書の諸處に於て極て明瞭である「誰か救を受くべきや」との弟子の問に答へてイエスは「我と福音のために家或は兄弟……を捨つる者は……後の世には限なき生命を受けん」と答へ給ふた(マコ十章)、もし新約聖書中の各書翰より救の永遠の意味を立證せんとせば我等は其引用すべき語の多きに苦む程である左掲の如きは其最も代表的なるものである。

讀むべきかな神われらの主イエスキリストの父、かれ其大なる矜恤<sup>あはれみ</sup>をもて我等を再び生み、我等をしてイエスキリストの甦り給ひし事によりて活ける望を得させ、亦われらの爲に天に藏め<sup>をさ</sup>ある朽ちず汚れず衰へざる嗣業<sup>ゆづり</sup>を得し給ふなり、汝等信仰によりて神の力に護られ既に備へある所の末の時に顯はれんとする救を得るなり。(彼前一章)

以て新約聖書に謂ふ所の救の意味を知るべきである。

救とは實に右の如きものである、人は往々にして之を淺く見んとし、「神の己を愛する者の爲に備へ給ひしものは目未だ見ず耳未だ聞かず人の心未だ思はざる者」である事を知らぬ、今や世界に充つるは淺き救の聲である、そして救を説く者にして未だ一人たりとも救を實現した者がなく、救の本義を世に向つて示すべき重責を持つ基督教會までが種々の社會的施設に没頭し、之に依て救を實現せんと企てつゝあるは何の陋態ぞ、救とは實に人をして永遠の榮光に浴せしむることである、かくの如き救に人を至らしむる力が福音あればこそ、パウロは羅馬大帝國の光輝を前にして「我は福音を耻とせず」と云ひ得たのである、一時的なる此世の救済の如きは縦し遺憾なく實現せらるゝとも、人の魂を其根柢に於て救済する事は出来ない、基督教の救が斯くの如き淺きものならば、それはわが持てる一切を棄てゝも獲得すべき値あるものではない、それがために「家宅いへ或は兄弟或は姉妹或は父或は母或は妻或は兒女或は田疇たはたを捨つる者」ほど愚かなる者はない、しかし乍ら福音の供する救が永遠の榮を意味する者なればこそ、「一切を捨てゝ」も之に與からんとするのである、「彼（キリスト）と其復生の力よみがへりを知り、其死の有様に循ひて彼の苦くるしみに與り、とにかくにも死にたる者の甦へることを得んがため」なればこそパウロはキリストのために「凡ての物を損せしかど之を糞土の如く意おも」ふたのである、福音のために犠牲の心を起さず熱心をも燃やさざるは皆これ其供する救の如何に大なるものなるかを知らぬからの事である。

原文の順序によれば十六節の最後には「信ずる凡ての者には、ユダヤ人を始めギリシア人にも」の二句がある、之については前講に於て説く所あつたが更にそれを補ひ度いのである、今十六節の思想を解剖するに先づ「我は

福音を耻とせず」と斷じて次ぎに其理由として左の四つを擧げて居るのである。

1、福音は力である。

2、福音は神の力である。

3、福音は救ひに至らしむる神の力である。

4、福音は信ずる凡ての者を（ユダヤ人をはじめギリシア人をも）救ひに至らしむる神の力である。

信ずる者は誰人にも救はれるのである、信仰といふ條件が一つ要るのみである、そして信仰といふものは其本質上誰人でも抱き得るものである、故に「ユダヤ人を初めギリシア人にも」である、世界の人悉く此唯一の條件に由て救に至るのである、信仰は實に萬人向である、さればこそ特に貴いのである一部の人の有し得るものが貴いのではない、萬人の手の届く範圍にある者が貴いのである、ダイヤモンドよりも空氣は貴く、爵位よりも水は貴いのである、前者は無用の贅物、【ぜいぶつ】後者はなくてはならぬ者なる故、そして萬人の用ひ得べきものなる故殊更に貴いのである。

之を肉體の醫療に譬ふれば信仰は種痘の如きものである、其事の本質上萬人に用ひられ得べきものである、種痘の如き安價にして簡單なる道を以て病を豫防し得るものは醫療の道としては最も理想的である、萬人が其利益に浴し得る、之に反してラヂウム療法<sup>ラヂウム療法</sup>の如きは頗る高價なる物にして少數の富者が其利益に浴し得るのみである、もし行の優秀、人格の高貴、眞理の完全なる悟得等を以て救の條件とするならば、それは恰もラヂウム治療の如く少數者に限らるゝものとなるのである、行は潔からず人格は高からず而して眞理の悟得完全ならずとも、たゞ赤

兒の如く父に信賴する時に於て救の第一歩に迎へ入れられるのである、寔に詩人テニスン<sup>テニスン</sup>の道破せし如く

信仰により、信仰のみによりて汝を抱く

證明し得ぬ所を信仰もて信じて

である。

かく信仰は萬人の抱き得るものである、「ユダヤ人を始めギリシア人にも」である、信ずる凡ての者には救に至るべき神の力である、「ユダヤ人を始め」とユダヤ人を眞先に出したる事について學者は種々の意見を提出する、併し之がユダヤ人の救についての優先權を認めた語でないことは明かである、若し然らば國籍の別が救についての一種の條件となることとなつて、明かに救拯の根本義に背くことになるのである、故に之は唯福音の光が先づユダヤ人に現はれ後ち異邦人を照らすに至つた史的視點の立場よりの語であると思ふ、「ギリシア人」とは此場合廣義に用ひられて異邦人全部を指す語である（行傳十四の一、哥前書十の三二參照）

凡ての人をして凡ての人の持ち得る信仰でふ一條件を以て救に入れしむるは福音である、かゝる力が福音に存する、簡單にして而も深遠、普遍的にして而も高貴、まことに人の教にあらざして神の福音である、人が努力の結果到達せし悟道にあらず神がキリストを以て——殊に其苦難と十字架とを以て——啓示し給ひたる神の道である、歡喜の福音、絶大の恩恵、類例なき貴きものである、福音は斯かる神の力である、故にこそパウロは之を耻とせぬとの事である、歎美すべきは唯一節の中に此大思想を籠め得たるパウロの偉大である、これ實驗の器<sup>うつは</sup>に靈感の語を盛りしものにして眞に神の言と稱すべき者である。

信仰は、行爲、人格、悟道等と異なりて萬人の持ち得るもの故救拯の條件として最も普遍的であり従つて最も簡易であると述べた、之に對して「然れども事實上信仰を抱ける者は世に少なくして従つて救に浴し得べき者も少ないではないか」との抗議が出るであらう、併し乍ら之は一時の事象を以て永遠の原理を蔽ふ見方である、その本質に訴へて考ふる時信仰は萬人の持ち得るものなるに反して、行爲の完全、人格的聖淨、悟道の完成等は其本質上（少くとも此世に於ては）萬人の持ち得る者ではない、今日の實際に於て信仰を持てる者の少ないことは、我とみずから心靈の戸を閉ぢて信仰の入る餘地なからしむる者の多い事を示すのであつて、決して信仰其者の非普遍性を示すものではない、信仰は其本質上萬人の持ち得べき者である、故に普遍的のものである、故に救の條件として最も理想的のものである、此事は原理として最も明白である。

以上を以て十六節の研究を終る。次ぎは十七節である、パウロは十六節に於て福音が萬人を救ふ神の力なることを示し 十七節に於ては其理由を示して云ふのである「そは之に於て神の義は顯はれて信仰より信仰に至ればなり」と。

先づ起る疑問は何故「神の愛」と云はずして「神の義」と云ふたかである、十六節に於て唯信仰のみに由て救はるとの恩恵の語ありて、讀者は當然「神の愛」なる語を豫期すべきに「神の義」とあるために意外の感に打たれるのである、「義」は原語 *dikaiooun* (ディカイオスネー)、英語に於ては *righteousness* である、又 *justice* である（正義、公道、公表、正道）、その眞意如何、又其十六節との關係如何は次回の問題とし、茲には二三の注意を述ぶるを以て止め度いのである。

かの浄土宗の如きは彌陀の赦免の慈悲を高調する點に於て頗る基督教に類似せる宗教である、法然、親鸞等が彌陀の本願に安心の根據を置きしは他力救済の秘義に徹したる者にして、其信仰の芳醇味は我等の稱讃を吝まぬ所である、さり乍ら我等が若し此他力宗の與へし見方を以て基督教に對するならば其は大なる過誤である、彌陀宗の根柢は慈悲であるが福音の根柢は「義」である、前者は徹頭徹尾慈悲の上に立ちて慈悲を通徹せしむる宗教であるが、後者は飽くまで義の上に立ちて慈悲を築成する宗教である、兩者の類似は其外現に於て存するのみであつて、其根柢に於ては天と地との相違がある、然るに此一事を知らずして前者を以て後者を律せんとする者が世に甚だ多い、これ福音より其根柢を除去する事であつて、凡百の過誤と不徹底とが其處に胚胎するのである。

福音は義を根柢とする、公義、正道は先づ慈悲赦免の前に於て在らねばならぬ、然らば人は自ら公義を實行實現したる後に於て初めて赦免と救拯との恩恵に浴するのであるか、然りとせば福音も亦一種の律法教にして「重く且負ひ難き荷を括りて人の肩に負はせ」る暴君である、茲に「神の義は之れ（福音）に於て顯はたればなり」とあるに注意すべきである、「顯はれたり」とは探究の結果としての到達を貴ぶギリシヤ人には愚かと見ゆるものである、併し神の義が人の努力の結果の獲物にあらずして神より顯はたものであると云ふは大に注意すべき事である、神は或道を取つて其義を顯はし給ひつゝある、是は福音の中に顯はれつゝある、或事に於て神の義は顯はれて居る、即ち或方法を以て神は其義を提供し給ふたのである、「其義を神は凡ての信者に賜ふて區別なし」（二三）である、即ち人は自ら努めて義人となりて救はるゝにあらず、神は其義を以て人に臨みて必罰の鞭を下さんとするにあらず、或事に於て神の義は顯はれそして信ずる者は神の提供する義を信仰を以て我有とするので

ある、「今律法の外に神の人を義とし給ふ事は顯はれて律法と豫言者は其證をなせり、即ちイエスキリストを信ずるに由りて其義を神は凡ての信者に賜ふて區別なし」とある。

英の評論家且詩人たるマシユウ・アーノルドは人間生活の少くとも四分の三（或は五分の四か六分の五か）は conduct（道德的行爲）であるとなし、そして此 conduct は宗教的に云へば即ち righteousness（正義）であると云ふた（アーノルド著『文學と教義』第一章を見よ）、アーノルドの正義觀は羅馬書の如く徹底した者ではないが、彼が人生の四分の三以上を正義と見たるは流石に卓見であると云はねばならぬ、義なき處に高貴はない、義なき處に眞も善も美もない、我等は義の範圍を脱して其處に赦免と恩恵と救済とに與かうとは願はない、たゞ赦免、たゞ恩恵、たゞ救済とのみ願ふは不健全なる魂の叫びである、義の範圍に於て罪の赦免に與かり度し、義の範圍に於て恩恵を受け度し、義の範圍に於て救済を得度し、これ吾人の心靈が健全なる時に於ては必ず抱く所の願である。

かの義なくして徹頭徹尾赦免と恩恵のみに終始する宗教が、其處に信仰的潤味の美はしきものあるにも係らず凜然たる高氣を缺きて動もすれば生命の沈滞を惹起するは、これその健全に於て缺くる所ある證左である、義は是非ともなくてはならぬ、義は是非とも備はらねばならぬ、義の上に愛あり愛の中に又義あるは人生本具の要求として缺くべからざる者である、義なき愛は我等の願はざる所である。

但し義は人の義でない、「神の義」である、神の義が此福音に於て顯はれたのである、如何にして神の義が福音に於て顯はれしかは後の問題として、我等は神が義を顯はしたと云ふ一事を今は注意せねばならぬ、神は先づ義

を發揚し、樹立し、確保し、其上に於て人を義とするの道を取り給ふたのである、そして人は神が義を發揚、樹立、確保せし其上に於て赦免と救済とを得んと願ふのである、たゞ罪を赦されんと願ふのではない、唯救を得んと焦るのではない、赦免の與へらるゝ理由を充分に知り、救に浴し得る資格が或道に於て成立したるを示されたる上に於て赦免と救済とに與かり度いのである、これ人の内心の眞の要求である、健全なる心靈は斯く願ひ、そして此願の充たされて後初めて満足するのである。

そして神は人の此要求に應ずる道を拓き給ふたのである、即ち義の顯はれて同時に愛の顯はん事を望む要求は、義を顯はして同時に愛を顯はさんとの聖意と合致したのである、神は愛の神であると共に又義の神である、彼は愛のみを以て人に對して少しも義を示さぬことは出来ない、人の要求に於て然るが故に之に應ずると云ふのではない、神は其本質上この兩者を以て人に臨まねばならぬのである、そして人に於ては到底不可能なる此事を神は爲し給ふたのである、彼は或道を取つて其義を顯はすと共に其愛を顯はしたのである、即ち人の罪を處罰すると共に其罪を赦したのである、只所罰を以てのみ止むることは出来ない、又只赦免をのみ與ふる事は出来ぬ、即ち或道を以て兩者を同時に顯はしたのである。

然らば神の義は如何にして發揚せられしかとの疑問が起る、しかし乍ら之は羅馬書の本館に入りて明示せらるゝ問題である、今は唯これが羅馬書の主題として告示せらるゝ、我等はその輪廓をさへ知れば足るのである。

パウロは「私は福音を恥としない」と宣言し、その理由として、福音は神の力であると述べた。力と言っても、良い力と悪い力がある。ヨーロッパの戦乱以前に一時的にヨーロッパ人を支配しているかのように見えた、いわゆる「力の福音」のようなものは、この悪い力の方である。その悪さは、結果が証明した。これとは異なり、福音は神の力であり、もちろん、良い、尊い力である。すなわち、「信じる全ての人に救いをもたらす」力である。「信じる全ての人」については前講で述べた。次に生じる問題は「救い」の意味とは何か、ということである。

救いという言葉は、今日、かなり広義の言葉として使われている。福音以外の様々な救済事業においても、この言葉は常に広く使用されている。社会的な意味での救いがあり、道徳的な意味での救いがあり、また思想上の救いもある。また、キリスト教の救いについても、今日の人が考えるところはかなり漠然としたものであり、悪い行いが改まったこと、あるいは福音に心を寄せるようになったことくらいを救いと見なす人が多い。キリスト教の伝道師と称する者の中ですら、この種の浅い見方をする者が多く、洗礼を受けて教会に加入したことをもって救いに見なして安心し、その後の心霊の発育について何の配慮も払わない者がいる。これは実に甚だしい誤りである。

しかし、「救い」とは元来、このような浅いものではない。原語の *sotheia* (ソーテéria) は、新約聖書においては永久的な意味を持つ言葉である。今、この言葉に関する二、三の大家の解釈を参考のために以下に書き記し

てみよう。

(イ) ソーテériaとは、メシア王国における永遠の救いを言い表す言葉である（マイヤー）。

(ロ) ソーテériaは二つの意味を兼ね備える。すなわち、一面では滅亡からの救出を意味し、他面では神と共にある永生の交付を意味する（ゴードー）。

(ハ) ソーテériaはメシア的救出を意味する言葉で、ユダヤ教においては民族的な狭い言葉であるが、キリスト教においては高い希望を伝える言葉である。後者の意味においては、この言葉はメシア的救出の全範囲、すなわち、消極的には全人類に臨んでいる神の怒りからの救済、積極的には永遠の生命の賦与を包含するものである（サンデー）。

すなわち、救いとは単なる悔い改めを意味する言葉ではない。この世においては罪に死んでキリストに生き、罪の結果である死（神の怒り、滅亡）から救われ、復活して主の栄光に似た栄光を受け、永遠の世界に永遠の生命を受け取ること、これこそが救いである。新約聖書のソーテériaは、これ以外を意味するものではない。これは忘れてはならないことである。

このことは新約聖書の至る所で極めて明瞭である。「誰が救われることができるのか」という弟子の問いに答えて、イエスは「わたしのために、また福音のために、家、兄弟……を捨てた者は……来たるべき世で永遠のいのちを受けます」と答えられた（マルコの福音書十章二十九節）。もし新約聖書中の各書簡から救いの永遠的な意味を立証しようとするならば、私たちはその引用すべき言葉の多さに苦しむほどである。左掲の引用はその最

も代表的なものである。

私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせ、生ける望みを持たせてくださいました。また、朽ちることも、汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これらは、あなたがたのために天に蓄えられています。あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりの時に現されるように用意されている救いをいただくのです。(ペテロの手紙第一 一章三―五節)

これによって、新約聖書でいう救いの意味を知るべきである。

救いとは実に右のようなものである。人は往々にしてこれを浅く見ようとし、「神がご自分を愛する者のために備えられたものは、目がいまだ見ず、耳がいまだ聞かず、人の心がいまだ思わないもの」であることを知らない。今や世界に満ちているのは、浅い救いの声である。そして、救いを説く者にして、いまだ一人として救いを実現した者がいない。救いの本義を世に示すべき重責を持つキリスト教の教会までが、様々な社会的施設に没頭し、これによって救いを実現しようと企てているのは、何という恥ずべきことであろうか。救いとは実に、人を永遠の栄光に浴させることである。このような救いに人を至らせる力が福音にあればこそ、パウロはローマ帝国の光輝を前にして「私は福音を恥としない」と言い得たのである。一時的なるこの世の救済のようなものは、仮に残すところなく実現されたとしても、人の魂をその根底において救済することはできない。キリスト教の救

いがこのような浅いものであるならば、それは、我が持つ全てを捨ててまで獲得すべき価値あるものではない。それがために「家あるいは兄弟あるいは姉妹あるいは父あるいは母あるいは妻あるいは子女あるいは田畑を捨てる者」ほど愚かなる者はいない。しかしながら、福音の提供する救いが永遠の栄光を意味するものであるからこそ、「一切を捨てて」もこれに与ろうとするのである。「キリストとその復活の力を知り、キリストの苦難にもあずかって、キリストの死と同じ状態になり、何とかして死者の中からの復活に達したい」ためであればこそ、パウロはキリストのために「すべての物を損としたが、それを糞土のように思」ったのである。福音のために犠牲の心を起こさず、熱心をも燃やさないのは、皆これ、その提供する救いがどれほど偉大なものであるかを知らないからである。

原文の順序によれば、十六節の最後には「信じるすべての人に」と「ユダヤ人をはじめギリシア人にも」の二句がある。これについては前講で述べたが、さらにそれを補足したのである。今、十六節の思想を解剖すると、まず「私は福音を恥としない」と断言し、次にその理由として次の四つを挙げているのである。

1、福音は力である。

2、福音は神の力である。

3、福音は救いに至らせる神の力である。

4、福音は信じる全ての人を（ユダヤ人をはじめギリシア人をも）救いに至らせる神の力である。

信じる者は誰であっても救われるのである。「信仰」という条件が一つ要るのみである。そして信仰というもの

は、その本質上、誰でも抱き得るものである。ゆえに「ユダヤ人を始めギリシア人にも」なのである。世界の人すべてが、この唯一の条件によつて救いに至るのである。信仰は実に万人向けであり、さればこそ特に尊いのである。一部の人しか持ち得ないものが尊いのではなく、万人の手の届く範囲にあるものが尊いのである。ダイヤモンドよりも空気は貴く、爵位よりも水は貴いのである。前者は無用の贅物であり、後者はなくてはならないものであるゆえ、そして万人が用いることのできるものであるゆえ、殊更に貴いのである。

これを肉体の医療に例えれば、信仰は種痘のようなものである。その事の本質上、万人に用いられ得るものである。種痘のように安価で簡単な方法で病気を予防できるものは、医療の道としては最も理想的である。万人がその利益を享受できる。これに反して、ラジウム療法のようなものは、非常に高価な物であり、少数の富者がその利益を享受できるのみである。もし、行いの優秀さ、人格の高貴さ、真理の完全な悟りなどを救いの条件とするならば、それはまるでラジウム治療のように、少数者に限られるものとなるのである。行いは清くなく、人格は高くなく、そして真理の悟りが完全でなくとも、ただ赤子のように父に信頼する時に、救いの第一歩を迎え入れられるのである。まことに詩人テニソンの言い表したように

By faith, and faith alone, embrace,

Believing where we cannot prove.

信仰により、信仰のみによりて汝を抱く

証明し得ぬ所を信仰もて信じて

である。

このように信仰は万人の抱き得るものである。「ユダヤ人を始めギリシア人にも」である。信じる全ての人は救いに至るべき神の力である。「ユダヤ人を始め」とユダヤ人を最初に挙げたことについて、学者は様々な意見を提出する。しかし、これがユダヤ人の救いについての優先権を認めた言葉でないことは明らかである。もしそうであるならば、国籍の区別が救いについての一種の条件となり、明らかに救いの根本義に背くことになるのである。ゆえに、これはただ、福音の光がまずユダヤ人に現れ、後に異邦人を照らすに至ったという史的な視点からの言葉であると思う。「ギリシア人」とは、この場合、広義に用いられて異邦人全部を指す言葉である（使徒の働き十四章一節、コリント人への手紙第一十章三十二節参照）。

全ての人に、全ての人が持ち得る信仰という一条件をもつて救いに入れしめるのが福音である。このような力が福音に存する。簡単にしてしかも深遠、普遍的でありしかも高貴、まことに人の教えにあらずして神の福音である。人が努力の結果到達した悟りの道にあらず、神がキリストをもつて、殊にその苦難と十字架をもつて啓示された神の道である。歓喜の福音、絶対の恵み、類例なき尊いものである。福音はこのような神の力である。ゆえにこそパウロはこれを恥としない、ということである。讚美すべきは、わずか一節の中にこの大思想を込め得たパウロの偉大さである。これこそ実験の器に靈感の言葉を盛ったものであり、真に神の言と称すべきものである。

信仰は、行為、人格、悟りの道などと異なり、万人の持ち得るものであるゆえ、救いの条件として最も普遍

的であり、したがって最も簡易であると述べた。これに対して、「しかし、事実上、信仰を抱く者は世に少なく、したがって救いに浴し得る者も少ないのではないか」との抗議が出るであろう。しかしながら、これは一時の事象をもって永遠の原理を覆い隠す見方である。その本質に訴えて考える時、信仰は万人の持ち得るものであるのに対し、行為の完全、人格的な聖さ、悟りの完成などは、その本質上（少なくともこの世においては）万人の持ち得る者ではない。今日の実際において信仰を持つ者が少ないことは、自ら心靈の戸を閉じて信仰の入る余地をなくしている者が多いことを示すのであって、決して信仰それ自体の非普遍性を示すものではない。信仰はその本質上、万人の持ち得るべきものであり、ゆえに普遍的なものである。ゆえに救いの条件として最も理想的なものである。このことは原理として最も明白である。

以上をもって十六節の研究を終える。次は十七節である。パウロは十六節において、福音は万人を救う神の力であることを示し、十七節においてはその理由を示して言うのである。「福音には神の義が啓示されていて、信仰に始まり信仰に進ませるからです」と。

まず生じる疑問は、なぜ「神の愛」と言わずして「神の義」と言ったのか、ということである。十六節において、ただ信仰のみによつて救われるという恵みの言葉があり、読者は当然「神の愛」という言葉を予測すべきところ、「神の義」とあるために意外な感覚に打たれるのである。「義」の原語は *dikaionē*（ディカイオスネー）、英語では *righteousness* である。また *justice*（正義、公道、公表、正道）でもある。その真意は何か、またその十六節との関係はどうかは次回の問題とし、ここでは二、三の注意を述べるにとどめたい。

あの浄土宗のようなものは、阿弥陀の赦免の慈悲を強調する点において、非常にキリスト教に類似した宗教である。法然、親鸞らが阿弥陀の本願に安心の根拠を置いたのは、他力救済の秘義に徹した者であり、その信仰の芳醇な味わいは、我々の称賛を惜しまないところである。しかしながら、我々がもしこの他力宗の与えた見方をもってキリスト教に対応するならば、それは大きな誤りである。阿弥陀宗の根底は慈悲であるが、福音の根底は「義」である。前者は徹頭徹尾、慈悲の上に立つて慈悲を通じて救済させる宗教であるが、後者はあくまで義の上に立つて慈悲を築き上げる宗教である。両者の類似はその外見に存するのみであって、その根底においては天と地との相違がある。然るに、この一事を知らずして、前者の見方をもって後者を律しようとする者が世に非常に多い。これは福音からその根底を除去することであり、凡百の過誤と不徹底とがそのところに生じるのである。

福音は義を根底とする。公義、正道は、まず慈悲、赦免の前に存在しなければならない。では、人は自ら公義を実行、実現した後に初めて赦免と救いの恵みに浴するのであろうか。そうだとすれば、福音もまた一種の律法教えであり、「重く、しかも負い難い荷物をくくって人の肩に負わせる」暴君である。ここに、「福音には神の義が啓示されていて、信仰に始まり信仰に進ませるからです」という言葉に注意すべきである。神の義が啓示されたという事実は、探究の結果としての到達を尊ぶギリシア人には愚かに見えるものである。しかし、神の義が人の努力の結果の獲物ではなく、神から啓示されたものであるということは大いに注意すべきことである。神はある道を取ってその義を啓示しつつある。これは福音の中に啓示されつつある。ある事において神の義は啓示されている。すなわち、ある方法をもって神はその義を提供されたのである。「イエス・キリストを信じることに

よって、信じるすべての人に与えられる神の義です。そこには差別はありません」（三章二十二節）である。すなわち、人は自ら努めて義人となりて救われるのではなく、神はその義をもって人に臨んで必ず罰の鞭を下そうとするのでもなく、ある事において神の義は顕われ、そして信じる者は神の提供する義を信仰をもって自分のものとするのである。「しかし今や、律法とは関わりなく、律法と預言者たちの書によって証しされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人に与えられる神の義です。そこに差別はありません。」とある。（ローマ人への手紙三章二十一節、二十二節）

英国の評論家かつ詩人であるマシュー・アーノルドは、人間生活の少なくとも四分の三（あるいは五分の四か六分の五か）は *conduct*（道徳的行為）であるとし、そしてこの *conduct* は宗教的に言えばすなわち *righteousness*（正義）であると述べた（アーノルド著『文学と教義』第一章を見よ）。アーノルドの正義観はローマ書のように徹底したものではないが、彼が人生の四分の三以上を正義と見たのは、さすがに卓見であると言わねばならない。義なきところに高貴さはない。義なきところに真も善も美もない。我々は義の範囲を脱して、そのところに赦免と恵みと救済とに与ろうとは願わない。ただ赦免、ただ恵み、ただ救済とのみ願うのは、不健全なる魂の叫びである。義の範囲において罪の赦しに与りたい、義の範囲において恵みを受けたい、義の範囲において救済を得たい、これこそ吾人の心霊が健全である時に必ず抱く願である。

かの、義なくして徹頭徹尾、赦免と恵みのみに終始する宗教が、そこに信仰的な潤いの美しさがあるにもかかわらず、凜然たる高潔さを欠き、ともすれば生命の沈滞を招くのは、これ、その健全さに欠けるところがある証

抛である。義は是非ともなくてはならない。義は是非とも備わらねばならない。義の上に愛があり、愛の中にまた義があることは、人生本来の要求として欠くべからざるものである。義なき愛は我々が願わないところである。

ただし、義は人の義ではない。「神の義」である。神の義がこの福音において顕われたのである。いかにして神の義が福音において顕われたかは後の問題として、我々は神が義が啓示されたという一事を今は注意しなければならぬ。神はまず義を発揚し、樹立し、確保し、その上に立って人を義とする道を取られたのである。そして、人は神が義を発揚、樹立、確保されたその上に立って、赦免と救済とを得たいと願うのである。ただ罪を赦されたいと願うのではない。ただ救いを得たいと焦るのではない。赦しの与えられる理由を十分に知り、救いに浴し得る資格がある方法において成立したことを示された上に立って、赦しと救済とに与りたいのである。これは人の内心の真の要求である。健全なる心霊はこのように願ひ、そしてこの願ひが満たされて初めて満足するのである。

そして神は人のこの要求に応じる道を切り開かれたのである。すなわち、義の顕われと同時に愛の顕われを望む要求は、義を顕わして同時に愛を顕わそうという聖なる御心と合致したのである。神は愛の神であると共にまた義の神である。彼は愛のみをもって人に接し、少しも義を示さないことはできない。人の要求においてそうであるから、これに応じるといふのみではない。神はその本質上、この両者をもって人に臨まねばならないのである。そして、人には到底不可能であるこの事を神はなし遂げられたのである。彼はある道を取ってその義を顕わすと共に、その愛を顕わしたのである。すなわち、人の罪を処罰すると共に、その罪を赦したのである。ただ処

罰をもつてのみ終わることはできない。またただ赦しのみを与えることはできない。すなわち、ある方法をもつて両者を同時に顕わしたのである。

では、神の義はいかにして発揚されたのか、との疑問が生じる。しかしながら、これはローマ書の本館（主要な部分）に入って明示される問題である。今はただこれがローマ書の主題として告げられている、我々はその輪郭さえ知れば足りるのである。